

1 赤津の大松

通称「赤津の大松」と呼ばれていたクロマツは瀬戸の名木として知られ、赤津のシンボルになっていた大木です。その証に、大松近くの交差点は「大松交差点(現:赤津交差点)」とされ、現在も名鉄バスの停留所は「大松」とされています。このクロマツは火災により一部が損傷し、上半分を失っていました。しばらくの間は下半分は残存していましたが、その後、立ち枯れ、現在は根元の切株が残っているだけとなっています。



2 赤津焼会館

円筒状の建物の周りを赤津七釉の一つである織部釉の陶板で装飾され、深い緑色が美しい印象的な建物。館内には伝統工芸品や赤津焼が展示され、即売も行われます。

開館時間 午前10時30分～午後3時30分

休館日 月・火・水曜日

入館料 無料



3 作助陶房

加藤作助家は、慶長年間(1596～1615)に美濃国から帰村した加藤利右衛門(初代唐三郎)の弟景元を家祖としています。初代作助(景清)は景元7世にあたり、寿斎と号しました。そして、2代作助を継いだのが景義(号:春山)で、3代精一(号:春山)、4代紀彦と継がれ、現在の5代作助(「陶芸織部・黄瀬戸」で愛知県無形文化財保持者)へと受け継がれています。



4 唐三郎窯

加藤唐三郎家は、江戸時代を通じて尾張藩の御庭焼御用を務めた「御窯屋」でした。慶長15(1610)年に美濃国土岐郡郷ノ木村から帰還した加藤利右衛門が唐三郎と改名し、唐三郎家の家祖となりました。当時は尾張藩から屋敷地・窯場などが与えられ、苗字・帯刀も許されていました。唐三郎家は家祖利右衛門以降、累代13代にわたり「唐三郎」を襲名し、現在も唯一「御窯屋」の系譜を伝えています。



5 長谷山観音堂

創建は寛文年間(1661～1673)とされ、現本堂は天保10(1839)年に再建されたものです。建物は本堂、仁王門からなり、本堂の本尊は十一面観音像、脇立仁王像は木彫りでやや小柄なものです。年3回の御開帳の際には多くの人でにぎわいます。仁王門の仁王像は高さ3m60cm、朱塗りのたくましい筋骨、憤怒の形相、力感あふれる堂々たる裸形で左右に控えています。賽銭箱、棟札、地藏尊、石仏なども江戸時代のもので、かなり隆盛であったと推測されます。



6 雲興寺

尾張の曹洞宗を代表する寺院である大龍山雲興寺は、至徳元(1384)年に天鷹祖祐師てんようそゆうによって開山され、その弟子の天先祖明てんせんすめいによって、実質的に整えられました。境内には、毎年薄紅かった花をつける梅の木が植えてあります。これは天先祖明のお手植えとされ、現在は瀬戸の名木の一つに数えられます。

Check 本堂

雲興寺本堂は、天文年間(1532～1555)に焼失し、織田信秀(信長の父)の援助を受けて再興したとされています。その後織田、徳川の庇護を受けて維持されてきましたが明和4(1767)年の大洪水で再度破壊されました。現在の姿は安永9(1780)年に再建されたもので、屋根には赤津瓦が葺かれています。



Check 鐘楼(国登録文化財)

同じく赤津瓦が葺かれた鐘楼は、天和3(1683)年に建立されましたが、文化7(1810)年に再建されました。梵鐘は第二次世界大戦の供出によりしばらく不在となっていましたが、平成21(2009)年の鐘楼全体の補修工事の際に新たに鋳造されました。

Check 性空石

雲興寺の参道入口付近には、「性空石」と呼ばれる大きな石が祀られています。伝説によると天先和尚の前に人を喰らう悪鬼が現れ、そのような姿になった自分を救ってほしいと懇願しました。和尚は、この悪鬼を「お前の本性は空(何も無い)である。罪などはどこにもない。」と叱りとばしたそうです。その後、鬼神を「性空上座」と名付け、業報から離れて自由の境地に達した鬼神は、性空神として寺を病気・火事・盗難から守ると約束して、大きな石の中に消えたと伝えられます。毎年4月の下旬には性空大祭が開かれ、お札を求めるとにぎわいます。



7 凧山つばきの森

「瀬戸市を日本一のつばきの街にしよう」のスローガンのもと、瀬戸椿の会が平成24(2012)年に開園した森。約10,000坪の敷地の中に竹林、杉と桧の森、雑木林、ため池、約4,500本のつばきがあり、その間を遊歩道で結ぶように整備されています。園内には「ギャラリー遊々」と命名された一角があり、地元の陶芸作家による陶器のオブジェなど約30点の作品が展示されています。つばきの花が咲く3月下旬ころには椿まつりが開かれ、多くの人でにぎわいます。

